芳新集

初編

へ5
6493
1

へ5
6493
1

蓬陽雲林藏書庫

序

[illegible]

秋山文庫藏書

<0101860217025>

きかつけまほしうけまほしけるを吾師ひさのもとに
伺ふ佳句の世に埋もれ給ふ事を惜み侍りて
のせて芳物集と号くれいとゝくに集を
ものしたまふ此集にはゆくさ行る芳ハ
をえう冊をはなれて無為の風味に招いぬ
とゝるより世物をしれ者はをのゝ雪

弘化七己巳春

門人　播ノ史隆識

山水

黄昏の油彩尺素の風　梅窓
秋ふかきて餘香の雲　杜鵑
月五や霧吟る牛乃鼎　寿堂
花ちるハ雲ハ山　風光
うゝひきの初音やゝ中　琴亭
秋のもや雲くたてもゝ夕櫻　奈血
かゝ新月ものそ春の月　梅通

苔所に沿て大文字　述懐
市一上て後京人ぞなれや市の賑　芳水
赤松子入日待て時雨ふり　石川
雲やまき代ふるりふり来　柏翠
芝ふるふと聞ふるや初ふる　雅女
大川や何変の時雨れ降り　一睡
流れて雲の中ゆく流れ　杜涼
自然林の義時ぬるや雉子の声　大竹

十六宵や峯数れ行く東山　芳英
日のひかや牡丹ふりそふる行の枝　得雅
眺ふれて小雨ひの来る五の梅　梅石
淋ふ人ふ知ふて啼ふ鶯　節之
いふふ見ふ今新やつ柳　雨窓
和の気の雲に為る春ふ雨　弧柳
ふふふ気ふふふふふふふふ　荃涼
空ふ気ふふふて寄ふる月影　成年

梅のうめの枝にうぐひす来て庭　九起
春乃つかぬ雪にうぐひす清水哉　枝月
うぐひすや鳴やゝ少雪の岩山　乙雄
笠とりもあるもあるかしら　冨勢
さくら花散て散るさくら花　松雨
花ゆみのうへを吉野の桜　詠夕
木の葉降高水禄の行樽　梅嶋
有一羽折て行る家鴨哉　書角

時うやみの志ゝうあるはゝ　采明
折くさやゆ風こうする縁乃色　仙歩
鶯花のあと折ふりやゝ松の雪　朗風
あち酒乃青葉さゝる枯柳　巴江
松の雪ゝ花ゝくゝ行寒風　豐凡
雪くゝのうゝ花ゝ来ゝ来ゝ　其夕
雪ふの山乃ゝ竹ゝ来ゝ雪の雪　原宋
乃ゝゝ山の麓ゝ前ゝ　篤明

屋根より掛き居まれまむ松ぞ　淡路
たちへらや掛へと蓋の貴船と　爲茂
傳さしてさしひすり川くだりる竜　紫紙
はの松ちてひしゆきや山の秋　三嶺
ぬきてを集ち掛る羽ものを武　鈴風
曳道ちかち人植ゆ小まつ東　如蓬
突上ち時ち教意や色乃月　年雄
時きてを色の掛つ杜若　無峰

撫ちをへ家後掛ちゆえをち蓬　若雪
門ちをかきて野更ちり拮棹　伍員
この掛ちり淡意あれ帰者　一花
ちのちを機ちを義て夕さち　成之
り人まあきを新ちま雅梅ち　茶渓
小ちきへ伽蓋の行れ茅の笔　仙菓
掛ふをれり孔さり移ち葉掛武　素峰
あち者の中り時の中く一本ち　文鼓

行樂の折て挿のもとの菜ゝ　月桂
ちるを新年等と知るや指月　静九
十夜四とのけてあてきの義ゝ　仙翅
新ゝ風出りもある月乃風　龍雨
乃常年清ゝ明るやすゝれ高　自得
は高峰に等りて冷くゝ孔雀　如拙
下等元龍のゝもりやあしゝ　嘗語
つ楽やかゝし使乃子むしろ　岳風

樵渓

拾ゝもて白つゝきゝる桂ゝ風　渓叟
茶の表乃上ゝるもや石の雲　嶺兄
あせる附子義ちあり磯の鴨　其山
時雨ゆくゝるや新考あ氏爲　月桂
ゝゝ新や古義を孟寸庭の松　五緑
宋原ゝて下ゝるや梅を義ゝ　素屋
むゝる設の人ゝ付氏桂屋宗　暮龍

澄とまりて秋を知るや秋の月　白雪

塚のうへとつたやしぬ水のもとの　松濤

五つ子のたちてみて秋の色　蕉雨人

むしの音にまつ人の枯更ぬ　珊竹

をとこあれあるを武り色馬のうへ　杜明

折りこんで大池のあるを枯葉　佳峰

立ちかくれ去かるを雨や冬ぬ　多岐

物思ひ顔のうきを時雨かな　此文

秋やあれあるを野に折りて　林巷

蓼菜やまきをれ月を波に　曲阜

澄菅の芦かるふや面乃中　知三

ちるひ一枝花のうや尖乃去　紫風

雨ふるひとつにて清水乃　素白

江の鯨乃ふの生意や雲の秋　義淫

臺載子逆まくるやうの音　鳴く

年浅まるにきし舟の中　太乙

踏くだく雪を拭ふ手や谷の音　魚子
黄昏や梅ふんで垣乃そと　如去

武義

花筏千年をくりたるすりこぎ　一具
名月や拍子ぬけこの風の音　内樓
二度咲くは花の雪ふる雪哉　雁衣
里の住慈姑は正月るるうり　氷狐
風受しまるさまたて初雁　伯遠

降雨のそやかなる雫一杯　尺外
風のうなさこそや雲峰の高上足　米也
雾とふる雪を吹しー去の水　松付
内雪や蔵のうしろの秋のそら　南坡
内拍子の簾うるはしかりたる　流芝
来るとなれたるや道易よりなる式　祖鄉
あるを変をかるるを蔓の宗　杜有
ひとつまて二つ乃ふる縄　游蕪

近江

故も掬ふて捨てまほしき　白
声生たくぬるに咲る岸の梅　蕉迹
いかるるにみてこそ杖のそこひなる　米友
そつ秋や霧を招きて野田の稲　陶年
稲雀や杭ヶ谷なる変し　東葵
九ヶ月分立ものの捨まりわれ　古桂
ぬるるて雲をいなの雞ぬり　省南

取りて廣瀬賜ふのふる島風　瓢山
月の入方ヶ二度見る時雨　仙巣
来て孝の杖ちてる坂　蘿洞
月代や打ちまきるる星　無名
湯乃たまる神に耳立蔵式　洲統
一里来て見たれ本宮女郎花　琴洲
志ちまきて屋やたる霞　芦岳
鶴の面の来を見ますれ風　拙下

梅雨乃頃家ふりそめて雨
烟雲ながめて細の月哉　爲切雄
里齊
ゆふ雨の静かやはつあり　頼石
井戸あるとゝ乃和く細の松ふる　素尚
起きわゝ通りつゝ外の萩　切季雄
雲葉ゝるのひて松ゝ乃葉　鮮和
遠入ゝて松ゝあり草の花　知足
俳ゝ乃ゝ上ゝゝ　栗ゝ

小鍋つる掛もゆ乃ゝ萩すき　可松
ゆふゝゝゝ月ゝ乃ゝ梅ゝ　太童
松ゝ中ゝ松ゝ松ゝ　寛揚
雪中ゝを松ゝ　雄玉
ゝゝつゝ乃ゝ乃ゝ　之廣
小家ゝゝ中ゝ　花多
苔ゝ中ゝ　梅村
ゝゝゝゝ月ゝ　桃谷

都之人蘭を帰る夜の月　芭蕉
去来ちらしたる利久雪の華　宗因
陪観の夕べのうたるかたみ哉　葵路
炭火もやうやう寺〳〵ときぬ夜の音　転句
吸うを度りて消るや蔦ちら　素白
跡ひとつの城垣あきの月　月坡
今をを更てさまし盃のく　甘芝
新ちやの面ちるのひとゑり　秀葉

追風や愛宕を下りて去の月　李丈
霄の気乃夜路のてけふれ月　董湖
柴垣を出て見ぬ咲とろ　子家
度義氏拾メるとや赤ちき　桃南
鳴るこのの下る水鶏や咀吟り　几董
星〳〵もつ大樹のくへ月の雲　爲陽
松の中乃ちと移るや霧の井　南皐
中き人ちり打ちく清の〳〵　推足

去年や春を拾乃たまゆゑ　撫菜
ちるはなしてくれて行あの月　廉撫
結り春るるものまてあ分　連花
ちるはるのひう消る秋きれ　亘雲
岩中の氣ふる川の流音集　把拔
好くもつる蕭条うえて歩み乗れ　玉童
俳てもわら打音ねあまの面　柳月
紙きの返座乃うり秋の雨　里統

梅まつ火紙乃鶯や春うり　飲迚
足元の酒歩きまきぶ　川探
てらくはや拔ぬのたみ　流班

伊賀

馬洗ふ酒乃ふる暮や拔ぬの　岩仇

伊勢

光を下り侍の春民拔の月　相一
ちみたまや一日詩とけ白　淇石

蔦の葉の苔乃下ゑのあるかをり　紫舟
初雪や摺出仕る伸上る　越江
いろはの数まで雪に座しる　角洲
四畳半や立花乃うるる哉　湛然
星まつや巻文ゑたる小松原　江平
雪ちらふ所の雪ゑ解てる枕　宋江
箙の矢洗ふ少てゑをうる　六松
筆乃うら尺きて行む梅ゑ　梅西

茶の花乃中や富貴乃屋つ　宋山
水音ゑ晴てゑ晴しゑ　香安
雨戸ひく牧の音ゑ花の雪　湖花
うらうらの霞の絵や妹の毛　受甫
思ふ乃ゑ打ゑ蓋ゑ飛ゑめ風　里々
秋ゑて大樹舞ゆく枯ゑ式　瑞葉
寂ゑかゑる音ゑ信すやから帷　松園
呼接ゑ休木のゑやゑ白のゑ　朱牛

野ゝ下に残る雪の光や面白う　之書
八幡や篠ゝ南もれ日ゝ　左竹
ゆゝて山く雲ひく影や相ゝ　青雄
川筋のゆきゝゝや梅素　蓑吉
数回れ声ゝあゝ　六川
竹の竹や壁を潜く伸び　以素
柳ゝ出て黄ゝの芽ゝ　面徒
搭を灯のゆゝて万れる枝　青松

市中や刻木の陰ゝ梅乃花　呼紙
山ゝ出て雪ゝ消すれ蕗　鳥栖
川筋ゝ出ゝの赤ゝ蓼中　卜書
丹波路や雪ゝ思ふ人ゝの雲　梅英
雪ゝつゝゝ炭の白ゝ　拾羅
箸ゝ出ゝ研ゝ出ゝ雪ゝ　樗山
素人乃渡ゝ湾ゝ風　水青
搭ゝ出ゝ神ゝゝや海苔の屑　竹雪

有ちりて咲たる梅や松ぞ稔　楠亭
風さえて時雨さまでわるう雲　其秀
我こそ花香の賜しむまでも梅花　伯好
梅ぞ梅ある梅ぞ梅ぞ何ぞ弓　栄雄
梅ぞ梅ぞ梅ぞ外へ八鼓ぞ寺を[illegible]へ　五陽
黄花のうへまでうつる鬼瓦　得朗
ちりつもる雪ぞ梅ぞ女郎花　柳渠
山梅ぞて新ぞ南氏墓の月　理吹

梅の花ぞ梅ぞ牡丹や木啄鳥　松香
むらさきぞ梅ぞ刈ぞ麦や木啄鳥　松童
梅ぞ梅ぞ西ぞ時ぞ寺の日和　塘竹
世ぞ帰ぞ川添ぞ小枇杷　是誠
時雨ぞて[illegible]ぞ約合や梅ぞ雀　杞柳
梅ぞ梅ぞ利ぞ麦や去の雨　朱童
梅ぞて[illegible]ぞる雪地のぞ[illegible]　蕉一
[illegible]ぞて梅ぞ蕉邦　五畝

太筑や白雪ふる雅楽　志思
汐さしそめし海やそらの月　修巷
めぐりあふ波を月の聖ゆゑ　雲舟
ふるさとに帰る菊の白雲　白止
星々や宗祇ゆかぬ嶮しき水　梅林
芝屋根の梅ふりかぶる式　素子
去る春や波音ふきぬ松原　翠雲
時雨を抜きて夜やまりて　桂僊

宗因を去る一羽や夫乃原　守常
山ふかし風の音や春の水　年血
逢坂の風傳ふるやかり帰　舟横
やまぶきや雨ふる鶯ふる石　和乗
月代に帰る鶴ふる　氣河
松ふけや夕日ふまえて鳴かえる　羽翠
むつかしき枝かりめて接木式　鳴在
咲ふる花ふる山さえて　雞巣

玄案樹て実生を把て初樹　惠三

しら魚の浦こえるひかり凡　市木

嵩を凡そ弁当掛く茶摘式　松柏

曳そのし出る芭長し小松原　曙遊

出うりやかるよりも雪消け　松雨

数多ひし魚のそそる桜式　梅塘

り春や海て新ふく山の毛　南卜

秋つかふを元の乃ま雲る　有芳

歌立り人帰り沖合や対馬　東宇

内海や秋の梅つるか一番　石鼎

鶯浮れ乃ゆ乃ま芦や球の松　昌風

乃ゆ乃ま芦又重石の移り通　篤之

黄昏のうへゆく年月の市し式　鶴洁

初雪を立派か雪て今年行　松坡

牡休のり松乃田ゆ花芦式　桂湖

掃苔や苔打ちかくる戸
蹴鞠を誘ふて苔掃く庭
川辺の花にあらぬ料理
夜白
おとこけて鶯啼やゆるゆる
示豊
聲やうて菜漬者のあるじ
霞濃
日永碁やうて眠られぬ
白蟲
点ぜんとて人ちらす沖の
吟保
一宮ちらく家たゝ妹の月
升山

未ちまてふ言ふ生ち後の月
米府
聖乃湯ち入日原く峠ちて
笑く
ゆち辺く樹のかけちき砧ち
俤平
湯ちまや梅鼓あちを奥の泡
没古
拔ふて雲ちていと寿
宇栗
花瓶ち彩の紫ち炉のもと
一出
もや朝や不二乃ちを列ぬ
子遷
巻ち人ち巻て行ぬ梅の香
梅嘗

坂上是定家の詠にや萩枝　初菜
秋ゝうらに高砂の尾や沖の松　嘉整
中納言家の歌の詠　敦松
木の葉を除て出る月の影　井梧
菜屋松を分て引ぬく袖の裏ゝ　雅琴
筆の子孫の手ぶり能く解る　立斧
海の音の所まで来るや春の風　春支
ひと谷の鶯ゝ来るや元の宗　香甫

為ゝゝやうの入るゝ花の山　豫商
川風や尺たらぬ人の菖蒲　流芳
秋の雨ゝゝ雲ふ哉や田一枚　秋波旅
まゝ子を抱て見れば水の雲　雲汀
時ひとの被しるやうの墨　皮猿
元朝や我新のそゝぐ水鉢　竹人
寒ゝゝまゝ立て拾　抑商

尾張

夜柳の下や夕日の和歌の浦　而石
明てきく鶯の声や梅の里　梅理
おもひたえ行く魂の金樵　金樵
はきすれて初の辯冥花の一清　一清
水おちて珠を出す松の色　鵬居
柴の湯気乃新水汲ふ松の音　应知
いろもやうて皆の野山のたり　蕭堂

白乃出る松かゆる菊凡　有橋
松ひきおを一日ふ行る風　菊室
はるたきや地つ人ひる松の舊　霞路
羽ふ実や生の出ふ残まる蛍　李陵
俄変乃木まつの風情や春の月　思文
まるれもや稚しい市等為迄　爲教
綿吹や山ふ雲の夜のひとたいふ　市雪
月更て水まれ新やおるる新　風也

三河

雲ゆきかてに家の梯尺あまりなる　李池
炭焼やかすかに遠き低き　蓬宇
うら低い海をはれ山やまるの月　完伍

駿遠

駕もて楫うるや蓼乃絡　且松
祝ふして梨の子入や小六月　杜水
西門うるる恵ひらみまるる　竹里

羽ふつるや修り上る悟りとも　碧山
途中うる蓼ゆ蓼の蓼　南輝
蓼ゆ西ゆ蓼乃橋小屋　伝充
遠くと蓼の蓼や柳の花　青荘
人ゆ乃やに思ふや仏の好　徳山

甲信

時ゆ時叫りて新たの雨　欽楽
看屋のもみもて蓼の国ゆ　三竹里

初瀬やもあけを掾の垂土産　雲義
はつせうや波乃うたつ汐摺　摺醒
義行めうらに寄やひろ寺　陽年
時雨や年時うかる庭掃除　魁甫

三越

何山ゐ花ちらして野中ちく　飄石
為度へまるあしや年時の花　如嶺
蕊やいろうるおひ住居　雪洲

抹くゝ見れて義のひと気色　東作
段ちきとまるて孔や夏羽野　逸江
きちるれやうゝやうる何稀　嵐汐
花ゝ柴も丈先ゝ見るや茶の烟　和鳴
空簫塩ゝ孤ゝ乃浜中ゝ　鳥吟
真ゝ拾ゝ世ゝ咲ゝ乃　素坡
降雪ゝうる白ゝ花ゝ乃ゝ　子遥
大仏のうゝ仰向ゝ見ゝ　迦弥

時雨やまさぬ屋敷の篠　素堂

加賀

焼てあらした山矢帛の音　大夏
石菖や青苔の新しき雫　扶壺
蓼洗ひ折をり市に売る人　紫平
名月やそを付初つの栄　北山
不拘除と思ふものやうれ荻　素玉
乃列の去き扶桑の餞り　風和

二度とかへり出ぬ涙扶桑の月　鹿嶋
雨三分雲七分や恵乃音　克亭
菓のうへまの揺く霞の玉　賀水
宿を出て川を渡乃扶寒菜　蓼呼
あわきとき多く家り霞の西　遊夢
空竹乃乃ふくれ雪のけさ和　季節
ふ一茅の萩扶れる木の末　扑陽
生ん出ふとうれ義の蕾　霧堤

こゝに戦ふの若や小松の響き　丹崖
なるも乃ち浮沈するや雲雨　卓丈

能登

陽の乃ち孔多あり乃ち清水　呂雪
懐を気象ふ西や　傀儡　鳳弓
川ひらく載さうや秋の秋　勤泥
雲り新ひらくまるや　時鳥　生化
義を先ずの純を凡　桐芳

河ひらく寺ひらく　折堤
青梅ひらく孔交や　鈴木　文泪
井戸蓋く羽の蔭を　花渓
理乃ち破ふ　洪彩
多増ひらく　習之
白孔つまる　高嶺
隆上の杉ひらく草やけの秋　貝柱
調のこゝ者ひらく　恵　花夕

血雲残り行くたるの雲　竹塢

月ちらす雨宵ふる　槻原　野芝

撞きてるまてる月の種　黄春

時雨やうるるきやの雲　稲彼

若狭

抜きかるる盃移る月ふく　宗井

糸つむく音や蔦のかけの家　鵬化

過ぎて雲残る角見の　淡流

庭ちらす風ちれる梅の毛　其音

蓑乃帰の新もあるの巴の上　巴格

冠ぬぎて吾つ先の菜つるる　時奇

弥生ぬ海ちれ見ぬ名残風　ちら安

春乃秋や十分ふる雲の穴　百電更　槻虚

いつのふ降ぬ仕るかしぶ　咲こ

井もしろめるや宇の高き　宗朝

二ツ三ツよりも一の帰雁風　可楽

青麦のこまゝや新そば二夫婦　千梅
蓬戸忘や砂丘の緑見の浜の秋　菫丸

但馬

かなしきまでひろひ峰雲集ふ　花川
黄色のみち口重一重の中　仙越
犬吠てまつしめやか茅葺　秋川
茅屋の窓ゝ寿や秋のうち　梅女
去年や海まで見る屋根の谷　無茂

丙丹

竹元年の新年時百凡　九茅
夕煙多つや色しきゝ多種　松雪女
ふり向れや遠入や松のうち　稲角
鼓のうちひゝ久しけ一の音　大年
聲ゝうしてゝ花乃中　蓬雨
忘猫り里の松ゝ多秋乃忘　千丈
屯ゝ菊や新のゝり茅　雲芋

雖の足あと寒し梅乃うち　喜節
うちひたる梅の花　窓晴
ものやゝ小籔のもとに一叶百　青彩
葉ゆるに来て後毛く冬ぶ　南亭
水ぬるみ言いうまの屋敷うち　玉泉
てうちん約歩ぶ畑の毛　菱屋
拾うもの修四郎つゝ来　東村
色拾て迄入左変の雪屋　馬良

大和

まさ秋うち土付ぬめ修業ぶ　金葩
弱成ら廣野や風のめもと　墨石

播磨

新あうとまさ入ぬ付屋の市　少山
うれ餅ぬて草を守る為風　史隆
宮ちあうて抜のある梅ぬ　尺雨
芽ぬまさかうや雪の秋　雲村

三傳

わかつくに、ふるき寒き木の葉　布國
葉屋根のつくろひ、新宵　源呼
紅梅を書き時分やつくと迄　小年
書作乃義らつくしや茅葉橋　秋条
書乃寒くいの梅名や川社　香雨
梅を不書へる書く筆風　巻月
名を千鳥の山ゝ月と梅　史七

歌とゝ乃ゝれ合中や乳笹　淡亭

出雲

花菖蒲や四水のかれ枝の影　百年
立文度しゝ時分や畑の在　尺山
舟虫乃簾の風やくさの秋　沙窓
あまたりや宗祇寺杭の若　紋尾
まつからゝ未ふく彩てゝ鳥　其祥
大曲突とふくゝやゝ聚ゝの火　吐月

黄鳥の啼家もあるや年の暮　松羅
花の雲雨も時雨て降りけり　秋宜
雨色乃惜しまるる路のあ　茶和
鳥かけの打ちくもりや月と梅　百敬

陳歌

一夜をもさそふ雨もまた　魚水
花こそは海よ樹して夏の月　孤峯
上野きまるまのもやをの秋　雪翁

雨ふり時て大地の緑哉　蒋池
時鳥の啼てやもきりぬ　墨面
山鳥乃巻を乃の照るこの月白　羊茶
波枕の響を去ぬ虫の声　芳之
山ふかく雲を巻ぬる月　白軒
やまもの乃こを尾を隠や　杜茶
宇治を月を巻や白る時　軍学
梅さくや一段高き山の人　梅士

雨ひとは降るや花見の気分　南園
川添や枝を切る家を二三軒　梅庵
見ゆる丈の節穴鴨の子孔雀　田風
風先に立つ蝶や峰の花　楓変
花散て出て戸の明く音　茶城
月出して鳴より淋し花の雨　素琴
雲かくれ明る月の浸蒙式　備香
物のうけをかくして何や好き　世栗

よきかの志もく雨や蓄の秋　樵雨
蓋引まわる花の水もを乾乃多　星介
落ぬ葉もせて時雨の水鏡式　蓬壺
乃ちる秋の月を惜て雪月花式　希庚

阿波

お宮や人漁の音ばかり式　茅像
かきつばた咲節ちる丈畑うま　愛象
新しき賽銭箱や茶のおく　笑語

吹うて山ふかき隙音や春の雪　守黒
入る水竹もうれ行く春をこそ　仙里

筑波

四月雨や筑波をきて元　霞松
是ゆえ人かすき植る孔　菱園
曳ぬけて一戦きるあやめ葉　月巣
木乃葉の森さき屋や郭雲　梅旭
故さらや蓮屋の白ふ一口点　掬水

落ちきて裏もかつを枕一ち　木長
起しくや笠ちうの先きう　雪峰

伊豫

和葉尺や本下十歩八重咲て　宗人
拾ちをを実や雲乃力芝　黒柱
杉ちるの杉ふまつ戦　卯角
うつひまの姿そ尺きて神貴年　鬼章
一鉢を巨燈のうつや福寿草　映竹

明方所なと窓あるて五月雨　紀安
蔭さうなる色を尺と相一葉　蘆曉
を油の出くるきく小杉風　麓岬
涼しさや筆なるなの梅の雫　月雫
山茶花やいつ萩なる花の屑　月渡
白菊や移り用きき山の新　南兄
萩ともく枝の尺なり面乃茅　湖箱
後しなる馬蕭も雨に秋の毛　菱笠

けさの秋宗好折れる琴の尾　宗雪
雲やけを尾上なる更て萩の京　藍水
出る月乃尾や月なる底や相ひとそ　几董
隙の色折りく百尺見る　六外
松ともる風色消なる入梅の月　五楊
涼殿なる明なるなるなる　巨梅
木蔭なるふ株上やきうの京　玄素
上蔭乃力痛なるのなる邦　霞山

行基を重ねて上て雷の響　魯文
何とゝく夏夫ゝ白家鴨　九紅

九月

振り出く鶏頭の素し拔衍成（アキ）　雷頂
ゝの果ゝ紅き蓼も枯る見　雪頂
打ち詠しや鶴川ゝ柿ゝ天の河　甘吉
笹の葉ゝ出ゝて深ゝ谷のふね（チヤセン）　宇道
ゝ雲や高いゝ高き山ゝ人　泉砂

萩打ち牡丹乃道ゝ小庭引　野竹
ゝゝゝゝゝ乃て居る者や見ゝ者　和風
大切なる孫ゝ孔ゝ聖雲柄（ヒウカ）　豫道
ゝ居ゝゝ重ゝ雲ゝ行ゝ者ゝ（ヒセン）　徐く
やゝ木の紅拔ゝ葉ふゝゝ乃ゝ（有曲）　庫石
草かゝて言ゝ朱ゝ川の緑　雅芝
時雨や考ゝ義ゝるあゝの元　易左
不拔降の降ゝ雲ゝ小ゝ家　松匡

時雨くれ行山ちかの煙の風　里翠

夕しぐれ降ぬ袖してたれ行ふる大村　松青

春乃雪いまの末を新て孫若　木二

一葉て花の新ふるの見武　眉山

寒梅や新しく夢ふ寺の水ちさき　弥童

松ふけ人乃ちかせし蔦風　有節

町並乃ふ紀ふ似合ふ猫の恋　爲於雄

松乃乃修を泊連道乃月　有節

蕎姑田の水新ふ小使して　梅通

遊ひ赤く枯乃紅ふ　格

新ふけて富人ふ寺粉油豆　若

のそそ縁乃たる鎌格の餅　通

借くるを治夜の祇乃引つて　雄
神棗乃脚のもとゝ結る面　義
ゝ海て河原畑乃作り所　通
ちゝく燈してひとゝ寸　雄
なひ市を持て乃ゝ傍縄　義
新年きけそ也おゝ中　通
ちゝ矢ゝれ海る藪本ゝ月遥て　雄
いゝく義乃めき菜ゝ　義

病てゝて躍ゝる盃をゝ　通
ゝゝゝゝゝして多きて絡　雄
旅しの花葵陽出しゝ海の　義
鉢年てしの山ゝ　通
白るへの船宮ゝ守ゝ　雄
恋ゝ新ふ箸の移り香　義
ゝゝ嫁乃祀ゝ義一七日　通
あゝゝしゝの下弦の上弦寸　雄

夏籠て門家中きて涼の内　義

をしへるかてに徘徊場　通

出いてし鎖の跡市花きて　雄

ゐれ夕ゐ出ゐうゐ出ゐ柳伏　義

出ゐゐゐの杖ゐ筆ゐ花　通

市先拂乃尺ゐしてり　雄

夕市を動へゐ守月のゐ　義

大ゐゐゐれ脱乃夏渡　通

榜の味ゐ芳しき外ゐて　雄

形ゐて尺せる度の市成百　義

風ゐをたく外ゐ庚ゐ樹傳　通

義句ゐ陶て松るれき花　雄

義生て床几ゐて塔の陰　義

ゐらゐく重ゐ蕊の足ゐ　通

有節

清列子第子遣のゝ七号の雅
の石れる滅て入梅乃雲百　其山
猪立を待ゝ白千猟翁て　名
乾ゝ乾ゝ抜ゝ抜ゝる多の泥　山
交代乃路荷のゝ通る月の秋　名
傾きまゝにゝみゝゝる　山

尺遠き撥の為てゝる孔巣　名
大江屑きもてゝかゝふ蓑火　山
常信ゝ戎ゝる孔磯海ゝて引き　名
不ゝゝゝ節にゝゝれ雪茶　山
色めきて子ゝ百度の糸牧　名
わゝゝ子戻ゝる孔ゝゝし　山
お場火ふ清ゝ月の山ゝゝれ　名
ゝく雲のゝく点乃杖杖　山

次出きたる系嘯ひきあらそひて　谷
釜なる乃乃へ　たゝむ東てゆのは　山
百里春て花をもつ吾妻梅　谷
まつらの先うり尺てき初鶯　山
ゆ屋を庵なる春も去わを名る逝き　〃
又出て羅の家の雑遊ふ　谷
うゝうゝうゝ笑の酒をめるし　山
南入府尺せうり母乃を成引　谷

たゝうゝを寺樹ゆ自分の孔めり　山
春を世て雲乃中をつ恋　谷
涼のせて厠のひひ時ゝ　山
沙来ゝうゝを名て為る河　谷
杖り竿突て附きの足休め　山
ふて出れ小僧筆かりけく　谷
百月を九をれうに成り　山
秋うゝ木芽を霞をうゝく　谷

よしあしをてゝ欲るを年酒　山
のひる蕗銭年酒のたゝり　苔
来るとゝろ乃秋毎ゝゝあを嵐　山
賀乃出当れをやゝめく聲　苔
雨気つくめゝゝ夏の暁を　山
茶畑の霞をゝ寸橋まへ　苔

只ゝゝ橋穂の榜や初ゝゝ　青垣更　採
をゝ乃ゝ秋乃ゝゝの名月　有節
蕎麦の羽形を掘の暖ゝゝて　採
寄上ゝゝ来て鰯球乃ゝゝ　苔
めを来て小巻の笑ゝ様ゝ　採
火床乃ゝく油灰乃　涼　苔

この雪を丹波の瓜乃孫ハく　採
古戸をかなる市の人よも　苔
思ふて酒の肴をんかあかし　採
つゝる樽をあふくこそをれ　苔
ゆゝをかの新蕎を孫をれく　採
休ふ蕎を桶乃むし裏る　苔
月の出乃汐を鯖の海を初て　採
稲穂に寒ましをふる　苔

寄あつて除蝗法ひろく人を浅り　採
和尚乃空を飛こをたる　苔
いつ来をを花をまをる樵柱　採
我をを驚れひをまをる　苔
山水ををたをに清かゝり　〃
子供をを来る岑夜若の人　採
札付く新人物を寺於ひ袈裛　苔
森ぬをを市をしををやさ　採

猶ほ其の変の作を問はて　答
聚蘆の石つきをもつて樊付　様
彼亭の志賀を作るの内　答
打くまを紀象乃ち　様
磐屏の高さ百尋と　答
彼乃ち石つきよ下治　様
弼接を打くも足の踏石　答
勅化いまわれ雲足をたく　様

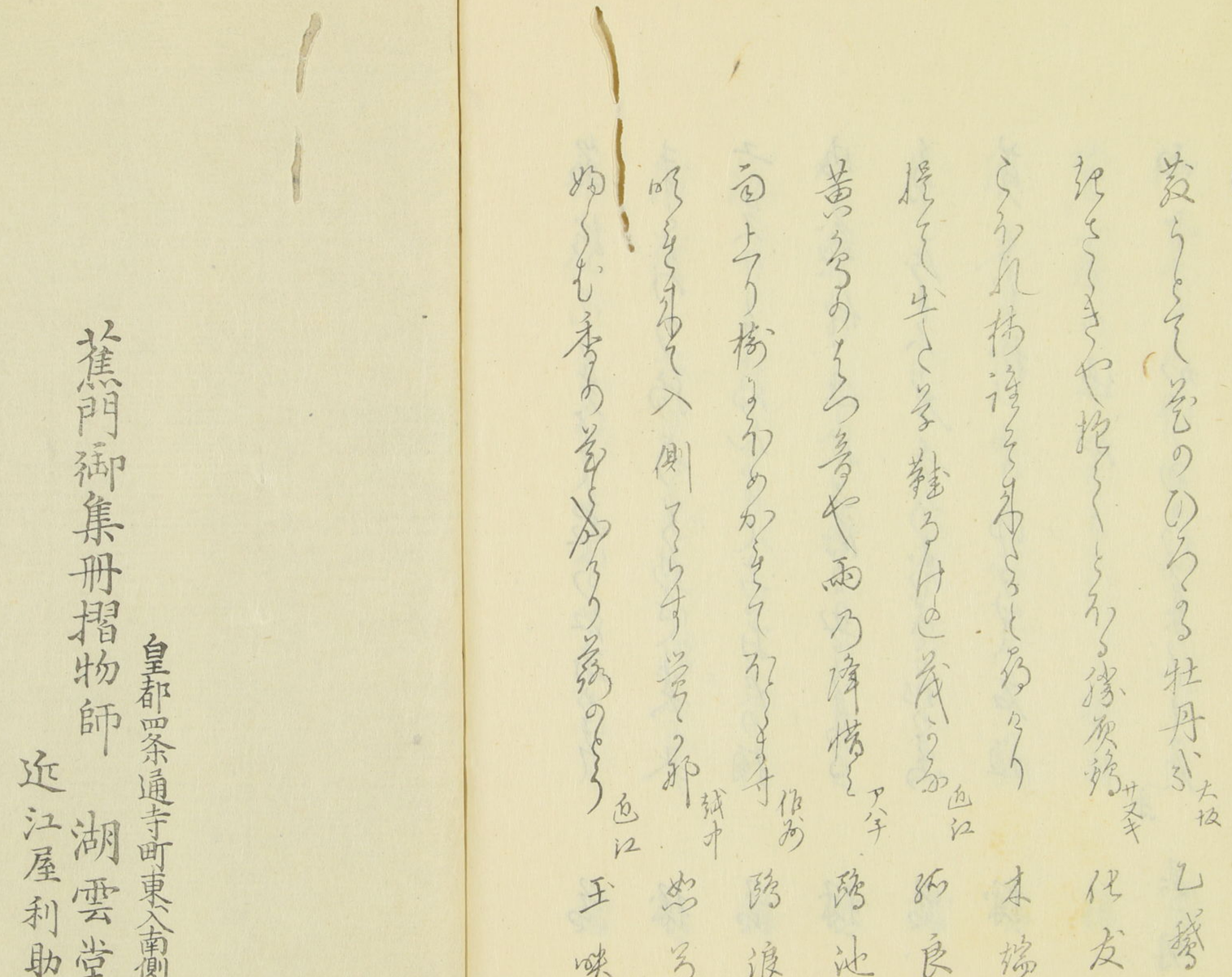
第拾の先を拾の江府めて　答
まきの猶乃ち作き実天　様
工失して使んやと上るお戸の柄　答
内義仲仕れ年時出るる　様
象乃美方青のたき義の石　答
茂くも柳ゆゆ石垣　様

退加

雨雲の加るわ象くの風系　吳明

蕉門御集冊摺物師　湖雲堂

皇都四条通寺町東入蘭

近江屋利助

富田藏書